

# 眞生

第一卷一十號

○力無き時の力となり、惱める時の慰安となり、絶望の時の救いとなるは唯一つ我が大悲のミョヤ獨りである。

○生も死も一切をなべて如來は之を知り玉ふ、そこには無限の慈悲のみである。

○如何なる罪も如何なる汚れも一切を許し一切を愛して向上の一路に我をして生かしむるはミョヤである。

○如來は一切の生命であり力であり我等の理想の根源である。永遠の生命もこゝに起り、無限の向上もこゝに始まる。如來は理想生命の根本である。

○惱める人よ何せにアナタはミオヤに來ないのか、病むも死すも一切はミオヤの懷ではないか、ミオヤに任せよ、そこにすべての慰安は來るであらう。ミオヤは宇宙の大慈悲であるよ。

○慈悲の外にはミオヤは無い、如來は我等の大ミオヤ、慈悲の源、靈の泉、汲めども盡させぬ慈光である。力なき時の力であり、惱める者の慰安であり、救なき人の救いである。(念)

# 眞 生

## 佛に於る途は

### 目 次

- 佛になる道は
- 信仰の念佛(三) 土屋 觀道
- 人と金と 尾 陽 半 島
- 懺悔録 演 阿 彌
- 「吾朋」便り

### ◆道友の人

- 哲學的に望むれば一切は哲理の世界となる。
- 道徳的に望むれば一切は道徳の世界にも見ゆる。
- 然し私は尙夫よりも、温顔きはまり無き慈愛の人をこそ望む。
- 慈愛の世界は單なる哲學の世界や道徳の世界ではない。
- 學理の世界も頼もしい、哲理の世界も排しはせぬ乍然人格の温かい慈愛の人こそ私は望む。
- 一切の問題を慈愛に抱つみ如何なる場合にも眞容を變へぬ夫は唯道友の人のみである。
- そこには眞面目と親切とを愛して上なき親しみとが如來の慈光に輝いて一切を許す。
- 温顔極りなき慈愛の人私は斯うした人格の道友を望む。
- げにや温たかき慈愛の人、夫は如來を中心とした道友の人のみである。
- あつなつかしき道友の人よ、私は斯うしてアナタを戀して斯してアナタを慕ふてゐます。(念)

「生より死。死を終末として盡きるやうな一本棒だつたら、私共の一生は猫と同じである。『生より死、死より生へ。肉に死して靈に甦るのだと云ふ。肉體の有る内は完全な生は無い、肉の亡ぶ事に因て初めて靈活すると、穢滅後に眞生があるとする。而し穢に即して光りが無いものだらうか。

『有漏罪惡の醜行も實に佛の如實相として輝けるものではあるまいか、そして無漏光の常住涅槃界に連るものではあるまいか。併し惡行も是れ善行、僞醜邪も全て眞善美だらうか。』遂に私達の認識は死の連続であると云ひ、生死の交雜であると云ひ、死生、生死の終結を豫想して一念往生、多念往生を論ずる。

『然して眞に終始是れ生、生、生の相續不滅なりと信驗する事を得る者はないか、認識可能の範疇を絶して生そのもの、裡に直參する者はないか、生そのものなりと認知する餘裕をも許さぬ、その一大事實になり切る事の出来るものは無いか、それが宗教の奥底である。

『知で不滅だ、生の相生だと無理押し付けに押し付けて安住してゐるのでは無い、生の泉となる事だ、無限に流れ流れて已まぬ生の流れとなる事だ。

『業事成辨した往生相は又一切を生かさで已まぬ還相である。自他一切を籠めて愛したい、愛す、救ひたい救ふ。佛は此最大欲念に徹した謂である。誰か佛を遠い者とせやう、佛になれずには居れぬ皆々ではないか。

『佛になる途は只一つ南無阿彌陀佛、是れ直道!! (尅)

眞 生  
信 行 の 念 佛 (三)

土 屋 觀 道

乍然夫等は佛教に對する疑問ではなかつた。否、少くとも法然上人の御心には入信以前と雖も佛教そのものに對しての疑いと云ふことは寸豪も在らせられたとは思はれない。従つて、諸經に説くところ皆之佛説なり眞實なりとして上人には受入れられたことも確かである。但し夫れは上人自證の靈境としてでないことは勿論、只佛説なるが故にといふ仰信の上からである。乍然已に之丈けの佛教に對する確心が如何ばかり上人の求道を強からしめ、且又上人の解脱向上の大道に効驗したかは申すまでもない。なほ夫れと共に上人御自身に於ける宗數體驗の反省は佛教の理想高きに從つて自己の内證益々之に伴はないことを發見せられたのである。茲に於て「吾等如きの罪惡生死の凡夫、戒定慧の三學も修し得ぬ衆生、斯くの如きは如何にして眞實の解脱ができるのか、今までの先覺の示す所、少くとも自分自身の學び得たる所、知り得たるところによれば佛教多しと雖も何れも皆これ三學を修して解脱を得べき法のみである。然るに今自分は如實に其の教へに従つて之を實行しかつたけれども自分にはどうしても夫れができな。やらないのではないやつて見てできないのだ、否單にできないばかりではないやるまいするまい恩まいと思ひ乍らにも、ともすれば我知らず之等のあさましき心が自分の心の中に起つて來るのを見る。して見ると自分は此の分ならばどうなることであらう、若し佛説に示すところによれば解脱どころ

か日々自分は流轉生死の業のみを作つてゐる、而かも自分の力では之等を止めんとしても止むることさへできぬでは自分の落行くところは地獄一定である。單に夫ればかりではない、かくては人生の意義がどこにあらうぞ、我等には佛性を有してゐるといふではないか而かも吾人は此の佛性を發輝して、諸佛と等しく自由解脱の身となつて無上正眞の天道に進むこそ人生々活の眞義ではないか、否少くとも斯くありてこそ自己の本心も満足し、そこに始めて永遠の生命も無限の向上も獲得せられて、自他平等の眞の平和もあるではないか。然るに此の自己自身の生活は如何、又社會人心の狂態はどうだ、親子相討ち、兄弟相喰み、朋友相反す、上は公家豪族より下萬民に至るまで此の世はさながら修羅の巷である、之が果して寂光の淨土であり又即身成佛の世界であらうが、否少くとも斯かる醜くき人類の生活は到底吾等の忍び得べきところでない。乍然どうしたならば此の戰亂惑道の巷より我等は眞實宇宙の大道に超出することが出来るであらうか、而かも自分の力では夫れができない、やらないでできないのではなく、やつても眞に力なくしてできないのだ、さればとてこのまゝは私ばかりではない、一切の衆生恐らくは皆斯くの如くにして永劫に争ひより争ひに走り闇より闇に陥つて永く生死の苦海に沈倫せなければならぬが、之單なる自分一人の苦しみではない、裏には我父君の遺戒に背犯き今は又自己の本心に背く、然らば此の三學の外に尙ほ吾等如きの解脱を得べき方法があるであらうか」と之れ眞に上人が一切藏經御披見の一大中心であり、又上人自身の苦悶求道の根本であつたのである。驚く勿れ上人十八歳の御時より四十三歳入信の御時まで實に二十有六年の長年月を経られたのであつて、而も藏經披見前後合せて五度に及ぶといふ。思ひ浮ぶるだに身心の戰慄を覺ゆる業ではないか。げにや人生の眞義に觸れんもの

かくありてこそ始めて無上正眞の大道も展開し來るなれ、上人の流れを汲まんもの正に此の覺悟なかる可からずである。

乍然此時已に上人求道の體係は之によつて見れば我等如きの凡夫が如何にしたならば解脫ができるかとの問題にまで進んでゐることは明かである。加之さらに惠心僧都の往生要集披見の後は愈凡夫解脫の方法はたゞ阿彌陀佛國に往生を遂ぐるより外ないことを略ぼ察知せられたものやうである。其他古來幾多の先覺が此土入聖の素懷を得ずして晩年多くは念佛に歸して往生を遂げたるの傳記多ければ上人ほどの叡智拔群の大徳に此事が判らないはずはない。然るに尙何故に斯くまでも上人は永く苦悶せられて容易に念佛の一行になり給はなかつたか、殊に惠心の要集によつて略ぼそのヒントを得られ此の事唐の善導の觀經の疏に明かなりとの指南は如何に上人の警覺の心をうつたことであらう。乍然夫では一遍や二遍ではしかと上人の心には夫が響かなかつた、而かも三遍目即ち前の闍藏の時の五遍を合せて前後八遍目、此の時忽然として上人の疑心は破れて慈光輝く如來の大悲は潮の如く上人の御心に流動し來たのである。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と上人の御心には今や歡喜の光が充たされて念佛の聲のみぞ湧出し來たのである。不思議なる哉この一刹那、此の念佛や如何にして上人の心に浮びしぞ、「一心に専ら彌陀の名號を念じて行住座臥にも時節の久近を問はず念々に捨てざるもの是を正定の業と名づく彼の佛の願に順するが故にといふ文を見得てのち、我等ごときの無智の身は偏に此文をあふぎ専ら此のことばかりを頼みて念々不捨の稱名を修して決定往生の業因に備ふべし、たゞ善導の遺教を信するのみにあらず、又あつく、彌陀の弘願に順ぜり。順彼佛願故の文ふかく魂にそみ心に止めたるなり」と勅傳の著者は上人

をして云はしめてゐる。されば上人入信の當體は正に稱名生因を以て往生の業因となし順彼佛願故の文を以つて安心の中心となしてゐる、即ち彌陀の本願に順じて名號を稱することを以つて上人の宗教は成立したのである。更らに往生の業因に稱名を以つてせることは「覺超僧都惠心の僧都にといひてのたまはく所行の念佛はこれ事を行ずるとやせんこれ理を行ずるとやせん」と惠心の僧都こたへの給はくころ萬境にさへぎることをもて我はたゞ稱名を行ずるなり、往生の業には稱名尤勝れたり、之によりて一生中の念佛其數を勘たるに二十俱胝遍也との給へり、然則源空は大唐の善導和尙をしへに順ひ本朝の惠心の先徳のすゝめにまかせて稱名念佛のつとめ長日六萬遍なり云々と傳ふるところを以つてすれば如何に上人が稱名正行を以つて往生の業因に備へられしかは明かである。

乍然こゝまで來る上人の念佛は實に獻身求道實に半生の努力によるものであつて選擇念佛の一行は上人全身の叫びである丈けに一朝一夕にして成立したのではない、故にこの稱名の一行に於て立教開宗の宣傳せらるゝは彌陀の淨土が報身報土であること、又如何なる深重罪惡の凡夫、愚痴文盲の衆生と雖も其の機の如何を問はず悉く念佛によつて往生のできるといふことの教理的確信によるからである。

乍然かゝる教理上の問題は支那の善導大師によつて悉く解決せられしものであつて我が法然上人はそこのまゝ之を襲用せられたに過ぎないものである。故に法然上人は自ら偏依善導といつて此のことを明かにして念佛一行を以つて往生の行業とせられた。乍然此の念佛たる三心具足の念佛であつて單なる口稱の念佛ではない、否少ぐとも三心の具せないやうな念佛ではないのであつて、吾人は念佛必ずしも三心の具したるものでないことを知らねばならぬ。然るを世人往々稱名の根本精神を知らずして三心を具せ

念佛に終るの弊あり、尤も社會動亂の巷に於て往生思想の高潮せる時に當つては貴賤を論せず往生を願ふて彌陀の救済を仰がんとする折柄なれば口より出づる稱名の念佛は自から至誠の心もこもり、我等如き自力解脱の力なきものなれば彌陀の本願に救はれるより外なしと深く如來の本願をも信じ念佛申す上からは往生したしとの願心も南無する歸命の心の中にこもつてあつたに相違なく斯くて稱ふる念佛には自然に三心も具して具つたに違いない。乍然凡夫のはかなさにはいつしか斯かる眞面目なる自己の反省もなく往生の心もうすらぎて口より出づる念佛も單なる習慣の念佛となりはて、遂には亡者葬式の道具となり、人類生活の中心を遠ざかつて來たのであつた。

故に何れの行も及び難き罪惡生死の凡夫として唯念佛の一行によつてのみ往生すべしと信じて一生を全心念佛に献け來つた法然上人の宗教も是等の誤まれる凡俗の人々によつてあはやその宗教の生命までも失はれんとして來たのである。げに信仰の内容もなき稱名行者の念佛それが何の意味をなさうぞ、何等の人格的反省もなき高聲念佛者の面にくさ、二重人格の別時念佛、口まねばかりの模倣念佛そこに吾人は何等の理想も發見することはできない。而して之等は今少しく念佛の眞義に向つて反省すべきでないかと思ふ。恐るべき此の念佛の怠慢者吾人は更らに深刻なる人格向上の強き反省がなくてはならぬ。而してかゝる輕忽なる念佛行者の多き時之をして眞實念佛の行者たらしめんには少くとも親鸞の如く、今一步の信心生因の一面をかゝげ來るのが自然の道行きではなかつたか、實にも信仰なき念佛行者ほど世にあはれなるものはない。何等如來を信するといふこともなく、徒らに世間通途の習慣に捕はれて、如來大悲の慈光も知らず、唯だ南無阿彌陀佛とのみ聲はりあげて繰り返す聲の念佛、之こそ葬式法事の

道具に使ふ信仰なき僧侶の念佛が、乞食坊主の布施いたたくまでの念佛ならばいざ知らず斯の如きは少しく眞實信仰に目醒めたる吾人青年の到底堪えうる所のものではない。

十方に淨土多けれど西方を願は 十惡  
五逆の衆生の生るゝ故なり 諸佛の中に  
彌陀は歸したてまつるは三念五念に至る  
まで自から來迎し給ふ故なり 諸行の中  
に念佛を用るはかの佛の本願なる故なり  
今彌陀の本願に乗じて往生しなんに願と  
して成せずといふことあるべからず 本  
願に乗ずる事は信心のふかきによるべし

(法然上人)

▲一瞬の停滞を許さぬ生命道は祈る事によりて私共を不露の進化道に燃焼させる。昨日も生き今日も生き又明日も生き生きたる——固い大地を喰ひ被つて芽生えずにはおかない生の意志に満ちてゐる双芽あ様に

▲祈りは枯れたる生を澀ほす淋しい曠野に歩み疲れた旅人が初めて索めた燈火の様だ

▲祈る事さへ出來ぬ人は哀れにも淋しい眞に祈る人は孤獨であるが力がある祈る人は大地にぬかづく人であるとして一切に感謝し一切を愛せんとする念願に燃えてゐる無關係の人の過ちも自分の過ちの如くに恐れをく

▲愛する事は人格の創造である愛せんとする努力は祈りの事實の中から廻向されるそして十字架がいつもその中に建てられてゐる一切への愛の廻向に如來道がある

▲愛三昧の中に方に満ちた平和寂靜の世界がある

(顯)

# 人と金と

尾陽半島

或客の曰く、  
「私等に宗教は無用である、世は益々不景氣となつて悪思想となり日常の生活に追はれて信仰などする暇がない金儲以外の御話は私等に取て必要なく蓄財すれば人の上座にも立ち尊敬も受け人も服従する、金の世の中だ、人よりも金、金は實に萬能力である、念佛するより仕事せよ、宗教は世情に疎くなり無欲に成り又寡欲たれと強ふるから自然に消極主義となり變人となるから私は好まない」と成程御説は一理あれども夫は未だ宗教を知らず其の法を信ずる心と修養の仕方が間違っている即ち至誠心の念佛が不足して居るからどつちつかずになり大害有て小利なし宗教を正しく受け入る力が不足して居て此の世の外に宗教があるかのように思ふから間違だと思ふつまり生活の外に宗教なく生活即宗教で生活が念佛に成て居る事が肝要、至心と歸命し法に徹底すれば左様の惡果は決

して無い正しき信仰は自然と心は平靜に満面喜色家庭圓滿商業繁昌するから隨て財産は益々殖て行くに相違ない徳の力を得て同時に黄金を得る。宗教は心身の欲望を捨てよと謂ふのでなくあらゆる欲情から脱却せよ求むる欲心を去れををしなければ眞實の信仰は得られない貴下は自身の實力に依つて大成金になられたと思ひなさるか若し一自己の力にて成り得たと思ふならば金力で威力を買ひ地位名譽も御買なされるでしょう宇宙の森羅萬象悉くが人間の力に依りて造り得る事は絶對にない如何に人智の發達科學の進歩するも人力に依て爲す事は全然あり得べき筈なし。自然の力此の自然の力は不可思議である絶妙である物質文明の時代であるから何も彼も科學的機械化するようになつたから佛様を理窟で質すのも無理ではない實證を示さなくては信心しないたゞ譯もなく難有い慈悲がある計りては心を惹かぬのも本當だらう所が此の信仰と謂ふ事は理論では駄目佛は元來肉眼では見る事は出来ぬいくら實證を擧げ功徳を列擧しても疑ふては解決できぬ今隣室で小供衆の御慰みに

蓄音機の音が聞ゆる實に不思議ですけれど私が斯くして話して居る此の聲は不思議と思ひませんか空高く飛ぶ飛行機よりも鳥の空を飛び翔るのを不思議とは思ひませんか石炭をたいて汽車が走り水力で電燈を點じ又電車を走らせ油にて自動車を走らすを不思議として人智の發達化學の進歩を賞讃する今日、白米や青菜を食して赤い血や赤い肉となり黒い髪が白くなり花は實をむすび青葉は赤くなる五穀の生熟等昔よりあり來りの事寫は一こうに不思議とも感ぜずして有難味も思はませぬか自然にさうなるのだから敢て珍らしい事でもないと云へばそれ迄の事私はその自然の力自然を支配する力其が尊き如來の光りと思ひ確に如來の靈應に違ないと思ひ感謝し更に疑ませぬ道理と道理に依りて得たる器械は其の源や源の源に認められたる或る作用を不可思議とせねばなりません。つまり原因の原因の其理の動から究極的作用變化の有様は如何にしても説明する事が出来ぬ不思議の力大靈の作用人力以外の力を眞實に不思議としなかつたなら其人は終生運命を豫知する事も出来ません

小供が青年に壯年か老年に成るのも、今老年の人も昔は赤兒なり人生の運命大宇宙の法則は一生懸命勉強しても吾等の智慧の力では解釋は出来ない何よりも唯だ眞面目の信仰に依て得られるのみと思ふ貴下と私の談話は形こそ二人の者に相違はないが双方の心が果して二つに分れて居るか貴下が大阪に居られる時貴下の心と私の心と一つであるが肉體こそ別々に成りて居ても心は素々分離したものに作つてない筈二人の心之が二であるか一であるか話す心と聞く心と無論別々だと區分的に考ふるのが人間の常であるのに如來様は之を一つに融合する是如來の靈應でないか有難い處ではないかそこで如來の光明に接近せる人程人格高く其光明に遠き人程人格ひく、利己主義の人物質本位の人と思ひます如來の光明に歸依する人計りにて組織せられたる會を光明會と云ひ其の會員は初對面でも十年の交り以上に打解け親子兄弟以上の交りです其も其筈皆様が如來を中心として居られるから心佛衆生是三無差別の人計りです。  
つまり心は一つなれども肉體は固々に區別して

方面を變へぬ實力を變へ別離してあるのは眞理に向つて活動ざるを爲だと思ふ汽車は軌道の上を走る如く人は眞性を基として活動しなければ脱線である佛の靈光は佛檀の中計りにて輝けるものに非ず空氣の中水の中土の中火の中生きとし生ける者は無論の事無機物全體形の中の其の中の光の陰の陰までも限なく有難い慈悲は行渡つて不印不離の御力で宿つて居る肉體に見える色や形は千差萬別でも如來は共通して大慈大慈の中にふくまれて居るから私も貴下も佛の一分子即ち佛の性は宿して居る然るに自我と云ふ三毒の煩惱が出るのは自我の出た證と思ひます煩惱を裁ち切りて廣大無邊の光明の中に入れて戴くには至心に念佛である。弱き心、弱き心を慰めて戴く終生向上に導きて下さるのは阿彌陀佛である其佛に御頼するが南無阿彌陀佛である私も金儲は大賛成金は大に必要其以上に必要なは光だ、光のある人無色の心は努力次第で幾千萬方に達し幾千年の光輝をあらわす光ある入光の中心は如來である自己と云ふ小我より大宇宙我に入るべし自己も大宇宙の一員世の衆生の一

人なり智力、金力、體力を得るも自己の爲に欲るに非ずして大宇宙に入りての活動の爲め努力するのである自己を研究し自我を去り自己を向上させてこそ大宇宙に取て實用の材である其處まで信仰せなければだめです男子が婦人に戀慕するに自己を忘却し全精神を異性の熱愛を通じてこそ眞の戀愛ではないか小我を捨て、こそ大宇宙に入れるのである而して無量無邊の一切衆生を助け一切の衆生の中に自己もあるが故に衆生を助けるのが即ち自己を助けるのである念佛を稱ふるに一切の衆生を助け共に向上したいと思ふ心を養ふなり。自己の心が三世千萬無量無邊の光となり一切衆生と爲り佛とも爲る南無と云ふは歸命なり歸命とは發願廻向の義阿彌陀佛に向ひて願ふ故に南無阿彌陀佛とは申なり何事も念佛に勝るべきものなしと信じ至誠心を以て念佛すれば病氣災難も消滅し無病長萬不老不死ともなる南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」

（此は或る人との談話を其儘記述せしもの文意を爲さず大笑一番南無佛）

## 懺悔錄（抄）其九

演 阿彌

私の全體で在します如來様よ。アナタはどの位私の上に恩寵の御手を下だし給ひつゝあるか。今現にかやうに刻々に加へらるゝ生活の脅威や、理想と現實との矛盾に於ける内省や、其他色々の負け戦さの中からも靜かに確かりと力強きアナタの大なる抱擁を感じ得る事は實に私自身に於ける大なる御恩寵の證明で御座います。願くは私の偽りなき此の告白をして最後迄障りなからしめ而して之を讀んで下さる貴き友達の上に幸多かる様なさしめ給はん事を切に々々御祈りいたします。

偕て此年の七月で御座いました。御盆に御助勢の爲に來て下すつたW上人は夙に信仰には意を注がれて居られましたので私達の話に非常に共鳴せられ、而して遂に同上人の發起で七月十七日の夜から二十日の夜迄三四夜の熱烈なる別時會が催されました。暑い眞最中雨戸を閉込めますので流汗淋漓の有様です。夜は明放しますけれども其代

り蚊に攻められます。而かも不眠でと云ふ事なのですから中々猛烈なものでした。連中はU上人W上人を始め道友の方達都合九人程でした。初めの晩は左程でもありませんでしたが翌日はもう皆なすつかり神祕的氣分になつて仕舞ました。此幾日間の神祕的現象は随分不思議と思ふ程の物もありました。恩寵を感得する人或は幻覺に迷ふ者など申上げますればかなり面白いとは思ひますが今は略します。余處目には馬鹿氣て見えたでせう、けれども私達は眞劍で而も血眼でありました。隨て道友の皆様は大概よい結果を得られました。然るに如何でせう！。私一人は滅茶苦茶になつて如來様も何も無い様になつて仕舞ました。終はつた翌日の朝になつて驚きました。本尊様などは些つとも有難くも何ともありませんのです。私は少なからず狼狽致しました。私が本尊様に向けて居つた尊敬心は畢竟附焼及に過ぎなかつたのです。今一旦にして朝の霜と消え去る事、正しく眞の信仰を得て居らぬ證據です。噫々。私は馬鹿です。私はつけ上がつて居つたのです。而して私は得意然と

して間違つた道を歩いて居つたのです。而して此處に天狗の鼻は折られて狼狽して仕舞つたのです。私の前途は暗黒と化し去りました。私は如何に進んでよいのでせう。噫々私の善智識よ。噫々土屋上人は何處に？。噫々辨榮上人は何處に？。杳として御消息も判りません。嗚呼。溟濛たる私の前途！。悲風蕭條として愁雲漠々。私は堪へ得ずして其日直にY市K町のS上人の處に走つたのであります。

然し悪い時には悪いもので漸くの思ひで御尋ねし  
たのに

「御留守です。」

と聞いてがっかり致しました。けれども

「自分自身の信仰の問題に關して是非共御相談に乗つて頂きたくて詫々遠方から参りました。」と申して名刺を差出しました處。奥様が御見えになつて

「晩には戻りますから先づ御上り下さい。」と仰しやつて下され而して上げて下さいましたので漸く救はれた様な氣になりました。御座敷で品のよい

御老僧に御目にかゝりますと、私の父とは昔の友達であつたとの事で大層喜んで色々御話をして下さいました。「死から復活したM老僧の話」などS上人とは又別種の味ひで拜承致しました。夕食後御本堂で念佛させて頂きましたが遺瀨無い悲痛な思ひのみ致します。漸くにして九時頃御戻りになりましたS上人は直に引見せられ而して來意を御尋ねなされたのち

「御念佛を申す時の用心に就て辨榮上人と土屋上人と少し異ひます。夫を御存じか。」と豫期しない御質問に私の「逆回心」は微妙にも方向轉換されかかりました。

「一向然様な事は存じません。何日やらの御手紙に——辨榮上人土屋上人は私達の觀音勢至です。微細な點迄丁寧に御指示を受けると——仰しやつて頂きましたが、其後まだ御目にかゝる事を得ませんので其儘になつて居ります。まして用心なぞと云ふ事は考へて見た事もありませぬ。」

「それでは御念佛申す時の形式は御存じてせうか。」

「イヤそれも一向に辨へません、半眼の方が氣が散らなくてよいと云ふ事は伺つた事もあります。がまだ試みた事もありません。」

「此次土屋上人に丁寧に御尋ねなされるとよいと存じます。眼は無論半眼にして首を少しうつむき加減に致します。注意を本尊様の方向即ち少し上向きにして南無阿彌陀佛々々と稱へます。要は如来様に御逢ひせねばならぬのですから、「如来見え玉へ々々々」と思つて御名を呼ぶのです。而して余念雜念が起りかけますと眼を見開いて如来様の御顔をよく眺め又半眼に閉ぢて一念を運びます、然し土屋上人のは「如来見え玉へ」とは思はず、「如来助け玉へ」との思ひで御念佛する様にと御すゝめになります。結果は同じですが一念一念の心の用ひ方が異ひます。」

「どうも色々有難う御度いしました。然様な事は初めて承りました。成程今迄の私達の道は間違つて居りましたのです。何等の方法何等の用意もなく唯だ無茶苦茶やりに御念佛して無理に靈界に押込まうとして居つたのです。此度あなたと御尋ねし

たと云ふ事は如来様に見離されて居ない證據です。誠に有難う御座いました。是からは御指示の通りに致します。」

「I文學士から唐澤で御別時したいからは非隨喜して呉れとの御手紙なので用事を繰合せ今月の三十日に出發して翌三十一から一週間御念佛したいと存じます。貴方も是非御出なさいましたら如何ですか。」

S上人から今迄祖山の別時會に來會を勧められて居りましたし、私の目下の悲痛な逆回心を回復させるにも絶好の機會であるかと思はれますので是非共御供させて頂かふと決心致しました。翌朝は早くから御一處に御念佛させて頂きましたがどうも氣が乗りません。何だか獨り取残されて居る様な淋しさでした。朝食後御自分の入信談や岡本某の話や西宗要の事などに就て有益な御話がありまして、

「辨榮上人の宗祖の皮髓を御覽になりましたか。」

「イエ、まだ拜見致しません。」

「其中に七覺支に就て説明されてありますが、其



第一擇法覺支の處に佛の白毫に意を注ぎ或は總相を想ふもよし又専ら名號に專注し口稱を以て心を統一するもよしとあります。辨榮上人は總相を想ふのが一番よいと御勧めです。常に佛の總想を憶想しますと目的を成就することが早いと云ふ事です。何日か高崎の某上人に其御話を致しました處上野から高崎迄の汽車中一心に憶想を續けて居つたが下車する頃は念に隨つて佛の總相がはつきりと浮ぶ様になつたと大相喜んだ御手紙を下すつた事が御座いました。新聞など讀んで時間を空費するよりもかう云ふ具合に時間を利したいものですな。

嗚呼。「憶想」！。此言葉は私達の間には一種異様の響を與へます。私がS上人を辭して歸へると直に道友の方達に今迄の杜撰を御詫すると同時に新たに聞き得たる全部を報告いたしました以來「憶想」と云ふ言葉は互に云ひ交はされる様になりました。而して其れは本當の意味ではなく一種の「觀佛」であつた事を白状せねばなりません。善導大師の御言葉の中に

「私達が如來様を憶念すれば如來様の方でも直ぐ私達を憶念して下さる。」

とあります。本當に憶想し奉れば直に温き反應を感じず可き筈で御座いますが、當時の私のなしたる憶想は極言すれば自力的臭味を帯びた享樂化的憧憬に過ぎませんでしたからよし多少の收獲はありましたにせよ、夫は幻滅の一幕に終つた果敢無いものなので御座います。けれども私達は熱心でした。道を歩く時にも、獨座瞑想する時にも、大空を仰ぎ見る時にも、日没の太陽にあこがれる時にも、眠りに就く時にも、起き出づる時にも、新聞をよむ時にも、食事をする時にも、目前に佛様の姿を畫がかう々々々とつとめました。而して夫が一番近い直線の道だと思つて居りましたのです。純眞純白の直線正道は唯一つである事は云はずとも判つて居ります。然し達觀せざるが故に幾つかの直線が繋がつて曲線と均しくなつて居る道を唯だ直線だと云ふ事文に迷はされて居る事が無いとは云へません。當時に於ける私の念佛は往生即ち私の生れがはりの爲でなくして唯だ見佛夫れも誤

られたる見像の爲にのみ回向されて居りました。夫は純眞がはありましたが根柢が違つて居りました事には氣がつきませんでした。完教の中にひそめる享樂的分子を見付け出して夫を弄んで居つたのです。よく云へば「禪三昧爲食」と云ふ事に酔はふとして居つたのです。

如來様よ。之はアナタの本當の思召ではありませんでした。アナタは私をして唯アナタの本源にアナタと私との不異を體認せしめ而して私に理想と現實とに於ける不一不異の世界を御與へなさらふとして居られますのにも拘らず私は唯だアナタの影法師を掴まふ々々々として追つて歩いて居るのでした。嗚呼。哀れなる私！。

### △相州長安寺念佛會にて▽

人身御供で名の聞えてゐる夫婦の橋の畔から『ソーヤも二二三だんべい』と教えられた時左手にはベルリの上陸記念碑がなつかしく眺められた。結衆の魂の躍進が打ち刻む木魚の音の中に尊

く聞えて来る。

虎視眈々四面楚歌の世界から五日間の精進念佛淨化運動は人類眞文化の基調であらねばならぬ道を探めて山に入つた釋尊の態度が思はれる。求道精進の世界には大阪岐阜静岡東京横濱よりこの會座に列する事に何の努力をも感じない人々の相が一層尊く感ぜられる、結集の多くは海邊に在る人らしい純朴と質實さを生活態度に無雜作にあらはしてゐる人々である。

釋迦は此土に彌陀は彼土に「往け來よ」との二河の白道を單直仰信口稱一行の行進曲に勇しく人生道場へ歩み出すべき我々の足どりに竿指された上人の調適なる説法は成滿の日あの最も深い感激ある世界を掘出さしめた。

信じ得る人は幸だ。信は實に涅槃の城淨土開顯の武器である。祈り得る人は幸だ、祈は佛に生き愛三昧の廻向淨土實現の力である。今や慈光は閑寂湘南の一草庵に滿ち、慧光は輝く結衆三摩耶の筵に。(一〇、八) (顯道)

吾が朋便り(九)

伊勢高宮 水野先生より

淨安寺に於て前後三々の御垂示と二回の御教示とによりてひどく私の心は變化をいたしました、御信念の強烈なる上人に靈感を覚えまして眼前に御姿が髣髴として去りませぬ、私にもかすかな御念佛の行者たる心がかもえ出て來ました、この汚れし心を御念佛で切開きたいと思ひます。

伊勢楠村 伴野三郎様より

阿彌陀佛のおひき合せよりまして御面會を得私の六年以前より惱みました菩提心を發せとの教へも上人様の御信心の光明に照されて心の曇りも晴れましたのは之又如來の光明として有がたう存じます。

つめて行くと行詰つてしまふので、つくづく情なくなり、泣きたくなります。

當麻 本間榮吉様より

只今朝の禮拜後漸く手紙を書きました、今頃は何れにお在しますかと慕い申てゐます、新聞で見ますと此頃の各出版物が大抵宗教信仰に關するのが多いやうでありますから如來の世界の展開をこよなき祝福に満てる事とひそかに感謝してゐます、眞生への御執筆いつも御目にかゝるやうな心で拜見してゐます、あらゆる運命と幸不幸凡ては人力の不可抗性のものと考へます時自から慰められます、唯清き正しき道を探求する時のみ無限の力そのもの、靈的經路の體驗を與へられます、ひたすらお上人から注がれる光明道の一路を確り

伊勢 近藤淨様より

此頃中は御親切なる御導きに預りまして豫期以上の盛會で嬉しさに涙ぐまるゝ心地であります、上人様喜んで下さい今晩(七日)有志の第十五六名の集りを得ましたから念佛修養やら座談會を催す事になりました、眞實の集りですから進ませていたゞく事と思ひます。今後一層御導きを垂て下さい。

相州長安寺 玉木辨靜様より、

お上人様此度は實に何ともどうも有難く感に泣く耳に候就ては眞なる心の合掌を得る日を期し念佛精進仕候尙本日青年會幹部の方参り今回の御指導を記念に上人雜誌名の眞生の二字を頂戴致し眞生同志會と命名して來る十四日寺に集り會の組織の相談も致すことに相成候間右御含みの程願上候

鎌倉 大佛上人様より

八幡長安寺の御別時にて尙一層深く難有味を感じました、最早佛に對し何等疑心も無く又質問も乞要件もなし、只々日々難有専念唱名致す様になりました事を深く感謝いたしました、尙十一月二十二日よりの五日間の鎌倉大佛殿の三昧會には………十方有志の参加を歓迎します。

静岡 法月光二様より

先生お目にかゝり度くなりまして、信州に御世話願つたとき以來お目にかゝらないからです、實はお目にかゝつても先生には中譯ない事ですがまだどうもお念佛が不斷相續にならないのです、お念佛を裏切ることが多くて淺猿しくなり、それに此頃は妙に片意地になつてしまつたのです、突き

と守つて行きたいと念じてゐます。

横濱 山崎作造様より

長安寺の合掌は誠に結構でした、何つも御別時毎に更に新しい生活には入りませぬ氣がします。

名古屋 板津友衛門様より

御巡錫の折りも餘暇なくて残念に候へ共大ミオヤの慈光は決して忘却不仕居候間御安心被下度候身の餘暇無きも宇宙の萬象は集り身に現はれ來る者と存候へば是も大ミオヤの然らしむる處と無餘念稱名裡に勤務罷在候間御安心被下度候。

東京 土屋觀道より

去る八月末より十月にかけての越後高崎茨城伊勢三浦半島に於ける四十餘日の傳道中道友各位の湛宏なる御厚情に對し衷心より深く御禮申上ます、尙日夜に繁き人生の荒波のことなれば如來中心の念佛の中に立て向立の一路に突進せられんことを御祈り申上ます。

寄贈並誌料拂込芳名

- 贈 ○十圓中村辨康様、井上清次郎様、○五圓四日市某氏松井戒順様、内田忠平様、角田貞子様 ○三圓山崎よね様 ○二圓竹内喜太郎様
- 誌料 ○十圓永瀨哲哉様 ○三圓豐田省三様 玉木辨靜様 大谷仙界様 安田中成枝様 ○二圓四十錢笹本戒淨様 ○二圓村上光徳寺様 多田助一郎様 八木善祐様 大阪大寶寺様 川村二郎様 加藤齋一郎様 加藤彌三松様 岡田橋太郎様 荻葉照心様 多田忍吉様 ○一圓五十錢丸地辨信様 中野吉太郎様 半田應稱院様 ○一圓十錢伊藤喜代子様 ○一圓岩見次三様 八木信剛様 向平造様 番山清兵衛様 小川廣夫様 長島仙松様 林熊次郎様 古林俊定様 高橋淳様 石黒彌致様 山崎米藏様 淺野戒全様 田中太眞様 福岡心行寺様 小口治三郎様 堺崇宅寺様 巢鴨朋愚様 櫻井藤吉様 河曲鎮子様 山木長作様 太田實性院様 ○六十錢内田忠平様 ○五十錢深見眞達様

念佛三昧會  
 日時及場所 十一月十五日より同月二十一日迄一週間毎日午前七時より午後四時迄南區生玉寺町大寶寺に於て勤修指導者 十屋觀道上人  
 信仰座談會 毎日午後六時三十分開始  
 注 參會御希望の方は来る十一月十日迄に大寶寺内大阪光明會宛と申込れたし遠來の方にて宿泊を望まる、向は本會に於て御便宜相計り可申候間前以て其旨御通知を乞ふ  
 大正十一年十月 主催 大阪光明會

○念佛三昧會  
 □日時 十一月二十二日より二十七日迄  
 □會場 相州鎌倉、大佛殿温暖にして閑靜之地  
 □導師 土屋 觀道 師  
 □申込 鎌倉大佛殿  
 注意 各地の有志を歓迎仕候

□年賀申込の廣告 (十二月十日迄)  
 新年號は裝禎も内容も更に新裝を加へて發行いたします。  
 ●地方各位も年賀狀の代りに眞生誌を利用して御名前を申込下さい。  
 無料でお戴せいたします。  
 ●特價提供として、一部あて、十部まで六錢、五十部まで五錢百部以上四錢五厘の割で差上ますから之又、御申込願上ます。(編集部より)

振替口座東京四七武八八番眞生社  
 大正十一年二月二日第三種郵便物認可  
 大正十一年十一月一日發行 毎月一回一日發行  
 定價 一部十錢 半年六十錢 一年一圓  
 東京市芝區芝公園第十四號地九番  
 編輯兼 土屋 觀道  
 發行人 眞生  
 東京市神田區駿河臺袋町一番地  
 發行所 眞生社  
 東京市外西巢鴨町二七二番地  
 印刷人 原 子 廣 宣  
 東京市外西巢鴨町二七二番地  
 印刷所 無我山房印刷工場

大正十一年二月二日第三種郵便物認可 大正十一年十月三十日印刷納本 大正十一年十一月一日發行 (毎月一回一日發行) 眞生第一卷第十號